

外国語教育における効果的なパフォーマンス評価について

植西 仁美（研究代表・和歌山大学教職大学院）・

中岡 正年（和歌山大学教育学部附属小学校）・寺田 好（紀の川市立粉河小学校）

高橋 綾子（和歌山市立吹上小学校）・高瀬 麻美子（和歌山市立紀之川中学校）

戸川 定昭（和歌山市立河北中学校）・菊池 有紗（和歌山大学教育学部附属中学校）

1. 研究の背景と目的

平成29年度に告知された学習指導要領により、2021年度（令和2年度）より小学校で、2022年度（令和3年度）より中学校で新教育課程が始まり、この改訂により、小学校、中学校とも、英語を使って何ができるようになるかということに、より重点が置かれることとなった。

これまで、評価に関しても、主にどれだけの語彙や文法の知識があるかを測っていたが、これからは、それらの語彙や文法を、実際のコミュニケーションにおいて、思考力、判断力、表現力等を働かせながら、活用できる技能としても評価していかなければならない。

そのため、授業においても「目的、場面、状況を設定したコミュニケーション活動」を多く取り入れ、児童生徒の英語運用能力を高めるとともに、知識だけでなく、活用できる技能と、他者に配慮しながら場に応じた適切な表現ができる力を身につけさせることが重要である。

しかし、残念ながら、授業で「目的、場面、状況を設定したコミュニケーション活動」を多く取り入れ、児童生徒の英語運用能力を高めたとしても、定期テストやペーパーテストに評価の重点が置かれているのが現状である。パフォーマンステスト（実技テスト）を行っていても、意識として教師も児童生徒も保護者も重きを置いていないように感じる。本当に児童生徒の力を測れるテストになっているのか、パフォーマンス課題に対して、適切に取り組んでいるのか、目指す姿は、教師にも児童生徒にも共有されているのか、パフォーマンス評価を実施するための時間と方法は確立されているのかなど、よりよく改善しなければならない課題点はまだ多く残されている。

本研究は、それらの課題について、授業実践を行いながら検証し、今後のパフォーマンス評価の在り方について考えていく。

2. 授業実践から

(1) 実践1（和歌山大学教育学部附属小学校 6年生）

授業者：中岡 正年先生

単元：自分達のことを伝えよう！～ My Best Memory ～

パフォーマンス課題：県人会の方との交流動画を作成する。

この実践でのパフォーマンス課題は、前年度に行ったウクライナへの募金活動が発端となっている。授業者は、児童から始まった活動の延長にパフォーマンス課題を設定するこ

とで児童に主体性を持たせることをねらいとしている。また、県人会の方は日本以外に在住のため、英語を使う必然性も出てくる。実際のパフォーマンス課題では、自分達の学校生活について伝えることを目標とし、相手を意識し、既習の表現を活用しながら、よりわかりやすく伝えることについて思考させている。

このように、誰に、何を伝えるのかという明確な目的がある場合、子ども達の目指す方向がはっきりとし、自分達で試行錯誤しながらも、懸命に考えている姿が見られた。

成果として、カリキュラムデザインを十分に組み立てることで主体と協働がうまく連動し、そして自分に何が必要なのかという自己調整ができ、より自分の思いが伝わるように意識し続けられたことである。また、最終のパフォーマンス課題に向けて、児童が既習表現をうまく活用できるように、毎時間の小さな活動を工夫して組み立てることや、ペアでの活動の様子をビデオに撮り、その場で全体指導として用いることにより、一層児童の思考力が高まったことが挙げられる。

一方、課題としては、児童に示した評価の観点が曖昧だったところがあり、児童が「どうすればより良い発表になるのか」という点をさらに明確にすることで、児童が評価者となり、より自分の改善点を見つけ、改善できるのではないかと思った。また、発表の中身と発表の技術についてもバランス良く指導を行うことが必要だと思った。

(2) 実践2 (紀の川市立粉河小学校 6年生)

授業者：寺田 好先生

単元：Let's think about our food.

パフォーマンス課題：他校の児童に自分達が考えた給食の献立を発表する。

この実践では、専科として4校の小学校で教えながら、単元の終わりで4校をオンラインでつなぎ、発表を行っていた。また、児童が考えた給食の献立を発表するだけでなく、栄養士、校長、クラスメート、専科教員がそれぞれの視点で評価し、高得点を獲得したメニューを実際に給食の献立として採用してもらうことで、児童にとってはまさにゴールがはっきりとした実践となった。その際にも、児童が給食紹介の放送を英語で行うなど、教室の中だけではなく、児童の学校生活に密着した課題であったこと、そして、他校の児童との交流で、さらにやる気を引き出すことができていた。

成果としては、教室中での「英語ごっこ遊び」にとどまらず、本物を体験できたことと、ICTの環境整備でより多くの人と交流できるなど、児童にとって忘れられない体験となったであろう。また、和歌山県産の食材を調べるなど、家庭科や社会科との横断的な単元としても、意義のあるものであった。

課題としては、4校同時に行うので、担任や他の先生方の協力が不可欠であるということだ。また、調べ学習も含むため、時間の制約があり教員の授業準備も負担が多いことから、このようなパフォーマンス課題に1年間で何度も取り組むことは難しいことである。

(3) 実践3 (和歌山市立吹上小学校 5年生)

授業者：高橋 綾子先生

単元：My hero ～あこがれの人を紹介しよう～

パフォーマンス課題：自分のヒーローについて発表する。

この実践は、中間評価を効果的に取り入れ、授業を重ねるごとに児童の成長が見て取れるものであった。自分にとってのヒーローについてどうすればよりわかりやすく伝えることができるか、また、わからない表現についても既習表現を用いながら仲間と熱心に考える姿も見られた。

成果として、単元構成と評価規準がはっきりとしているため、児童は自分がすべきことと目指すことが自覚でき、主体的に学ぶことができていた。また、思考する言語活動を行うための工夫が随所に見られ、まずは児童に「気づかせる」ことを大切に、自分たちで本時のめあてを考えていた点も素晴らしかった。

課題として、中間評価の中でも時間的な制約があり、なかなか自分たちでじっくりと思考する時間を確保できないことである。そして、家庭学習やさらなる児童間での活動をどのようにして、より効果的、効率的に行えるかということである。

(4) 実践4 (紀之川中学校 3年生1組、3組、4組、5組)

授業者：高瀬麻美子先生

単元(教材)：『世界子ども平和サミット』で朗読発表を行い平和の大切さを伝えあう。

パフォーマンス課題：A Mother's Lullaby の朗読テスト

この実践では、朗読テストをパフォーマンス課題とし、初めに示されるループリックから、具体的な Goal をつかみ、練習日程、時数等を把握し、ゴールまでの見通しを持つことから始めた。実施方法として、物語を4つのパートに分け、4人グループで各パートを担当し、授業内の決められた時間内に生徒各自で chrome book の録音機能を用いて録音を行い、Google Classroom で提出させた。

評価までの手立てとして、chrome book で朗読音源を聞き、発音、イントネーションなどを必要に応じ各自で確認しながら、一斉、個人、グループで練習を重ねること、また相互評価シートを用いて、他者(生徒・教師)からのアドバイスや評価をもらいながら毎時間自己評価シートを提出し、教師からのフィードバックを確認することを行った。

成果として、個別にきめこまやかに音読指導を行うことで、それまで見過ごしていた生徒の思い込みによる発音間違いを多く発見し、修正させることにつながった。また、各自で発音やイントネーション、リンキング、間の取り方などを必要に応じて繰り返し確認させることができた。

一方、課題として、聞くことに時間を使いすぎ、練習が不十分になる生徒もいたことや朗読テストへの取り組みを通して身につけてほしい英語らしい発音・リズム・イントネーションなどを、単元が終わると多くの生徒が忘れてしまうことである。

(5) 実践5 (河北中学校 全学年)

授業者 : 松本拓真先生 (1年生)、橋本くるみ先生 (2年生)
単元 (教材): 疑問詞のまとめ (1年生)、“Research and Presentation” (2年生)
パフォーマンス課題 : 疑問詞でのインタビュー (1年生)、調査の結果発表 (2年生)

河北中学校では、1年生で個人によるインタビューテスト (主に疑問文を使ったもの) 2年生で班によるプレゼンテーション (クラスで好きなもの調査を行い、それを班で発表する) を行った。

成果として、評価までの手立てやスローラーナーへの配慮もできていたことにより、生徒は達成感を得ることができていた。また、班としての取り組みを通して責任感を持って取り組むことができた。

一方、課題として、パフォーマンス評価で事前に暗記したり、型通りのやり取りについて一定の成果はあるが、さらに1文を付け加えたり、即興で英語を話すことは難しく、普段の授業の帯活動として積極的に取り組まなければならないと思われた。

(6) 実践6 (和歌山大学教育学部附属中学校 2年生)

授業者 : 菊池 有紗 先生
単元 (教材): Lesson1 USE Read “THE TALE OF PETER RABBIT”
パフォーマンス課題 : 聞き手を惹きつける朗読をしよう。

正しい発音で英語を話すことは英語学習において大切な要素ではあるが、日常生活で相手とコミュニケーションを取るために英語を使う場合、ただ正しい発音で英語を話せば良いというわけではない。抑揚や強弱をつけたり、表現方法が重要になってくる。この実践では、ピーターラビットの本文を読解し、話の展開や登場人物の感情の動きを理解した上で、聞き手を話に引き込むような表現を意識させることを目的とした。

成果として、聞き手を意識した朗読を実践したことは初めてだったため、生徒は新鮮だった様子で、生き生きと録音に取り組んでいた。班のメンバーで相談しながらどうすればもっと感情が込められるか、どうすればもっと聞きやすい朗読にできるのか、試行錯誤しながら何度も録音に取り組んでいた。録音した成果物は、お互いに聞き合い、良かったところや改善点を出し合っていた。

一方、課題としては、発表の録音に緊張しすぎて、本来の力を発揮できない生徒も見受けられたことである。対象生徒は、練習中の様子は活発だったのにもかかわらず、提出された課題では声も小さく、表現も豊かではなかった。もう少し撮影の機会や場所、期間をしっかりと確保し、ゆとりを持って撮影に臨めるように段取りを組むべきであった。

3. まとめ

これらの実践から見えてくるものとして、次の2つが挙げられる。

まず、児童生徒の伝えたい気持ちが高まる実現性の高いパフォーマンス評価を設定することで、教科書を使った活動よりも児童生徒の主体性が高まり、より良く表現するために一生懸命に取り組む姿が見られた。

2つ目に、ペア、グループで相互に繰り返し聞き合い、練習させることによって、学び合いが生まれると同時に、他者の優れているところや努力の成果を認め合いながら、知識や技能の定着が見られた。

これらのことから、適切な場面、状況、目的を設定したパフォーマンス評価は、児童生徒の学習意欲、そして英語力の定着にとって大変意義のあるものである。

しかし、全ての学校において、これらの実践のようなパフォーマンス評価ができているわけではない。たくさんの授業を見る中で、児童生徒の本当の力を測れているのだろうかという疑問を持ったことは多々ある。特に英語を使って何ができるようになればよいのかについて、感覚的な物差しで児童生徒の力を評価していないだろうか、あるいはきちんと学習指導要領に則った形で、身につけるべき資質能力を考えた上で課題設定を行い、評価できているだろうかと考えたとき、まず、パフォーマンス評価の課題設定ありきで、課題に取り組ませたいという教師の思いが先行している場合が多い。

今回は、英語専科や英語教育に長年取り組まれ、研究を続けている教師の方々に実践をお願いしたため、指導と評価の一体化が見事になされており、課題設定も適切なものであったが、このような取り組みを全ての学校で行えるようになるため、今後も教員同士で素晴らしい実践例を紹介し、共有していくことが必要である。

さらに中学校では、パフォーマンス評価が定期テストと同じ重みを持つという意識改革が教師、生徒、保護者にも必要であろう。

そして、小中連携の一つの方策として、お互いのパフォーマンス評価の課題と評価を共有することが重要であると考えます。